

図172 室町時代前期の丸瓦 紐2段

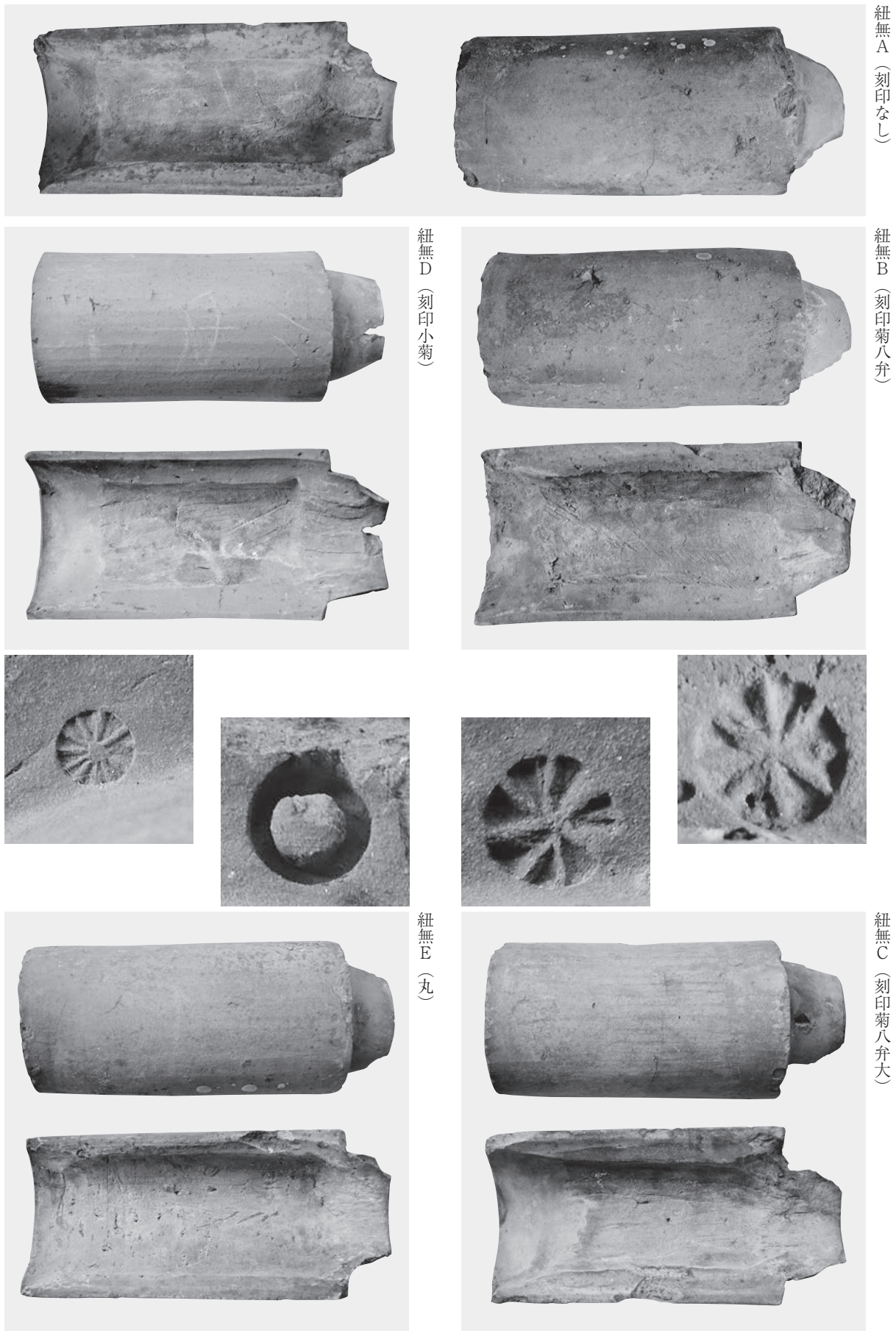


図173 室町時代前期の丸瓦 紐なし

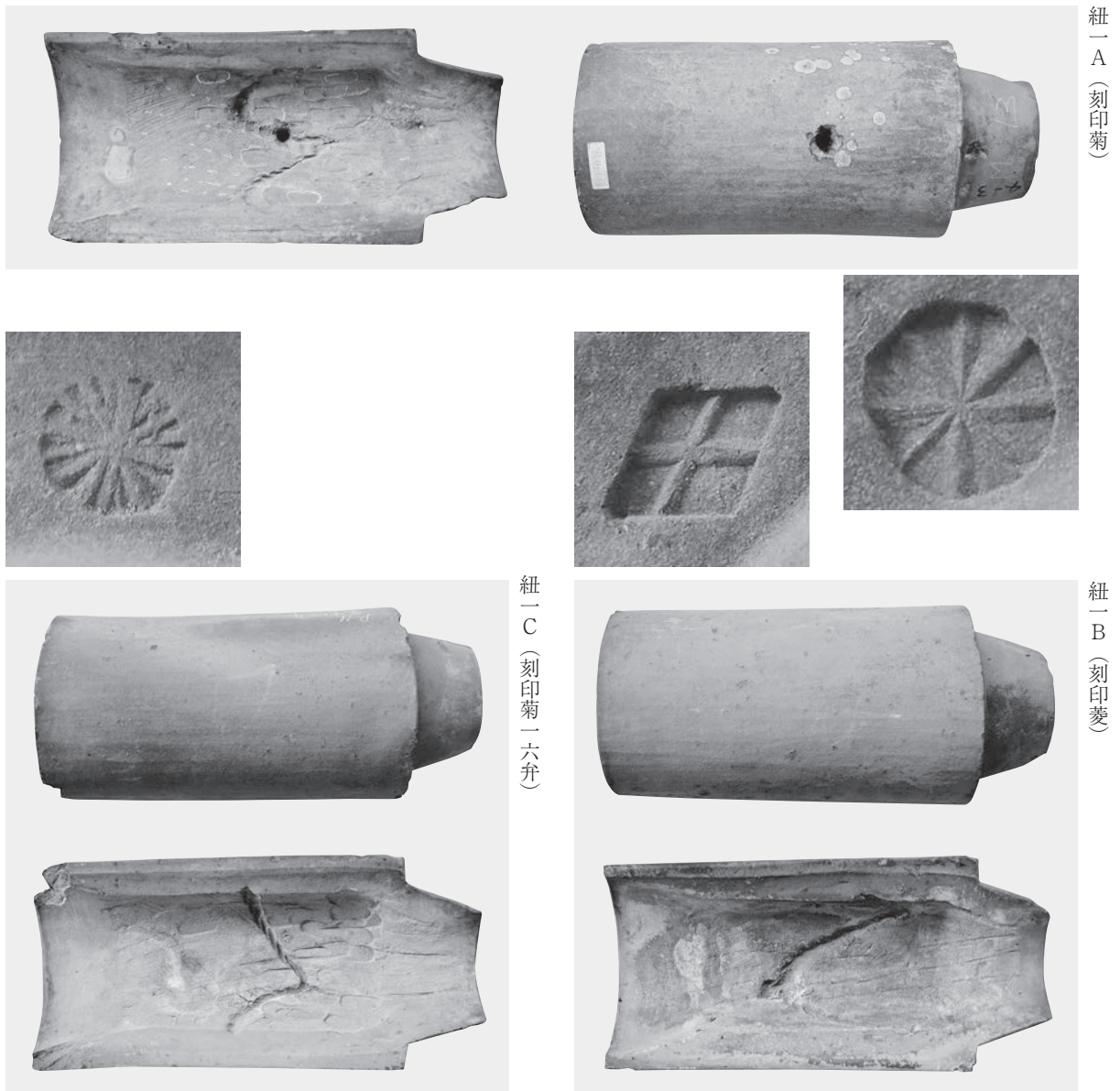


図174 室町時代後期の丸瓦 紐1段刻印あり

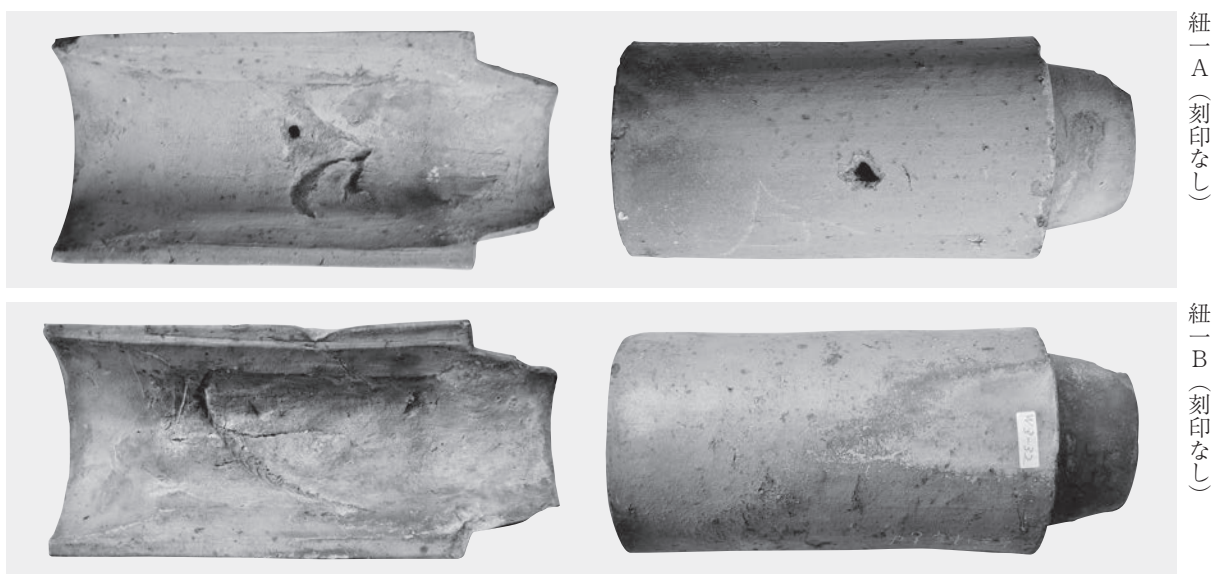


図175 室町時代後期の丸瓦 紐1段刻印なし その1

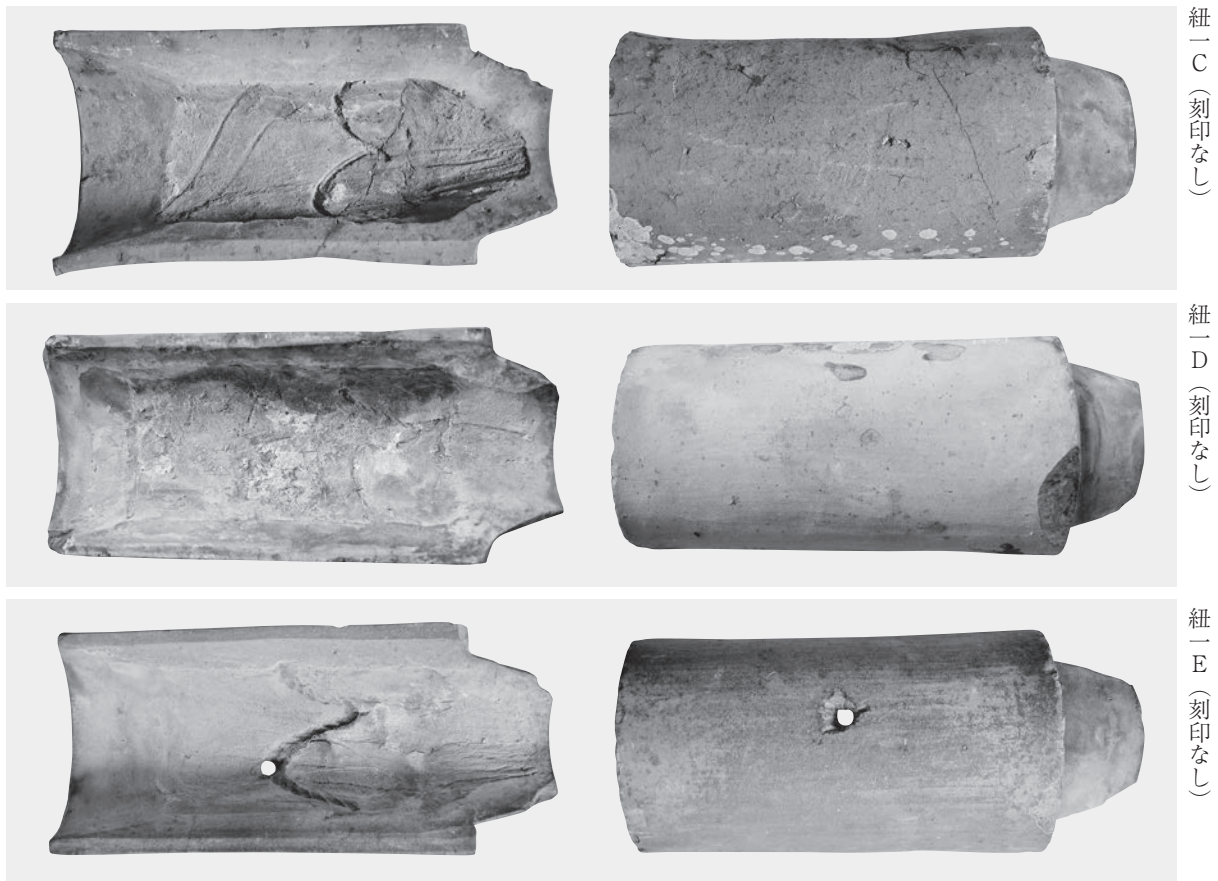


図176 室町時代後期の丸瓦 紐1段刻印なし その2

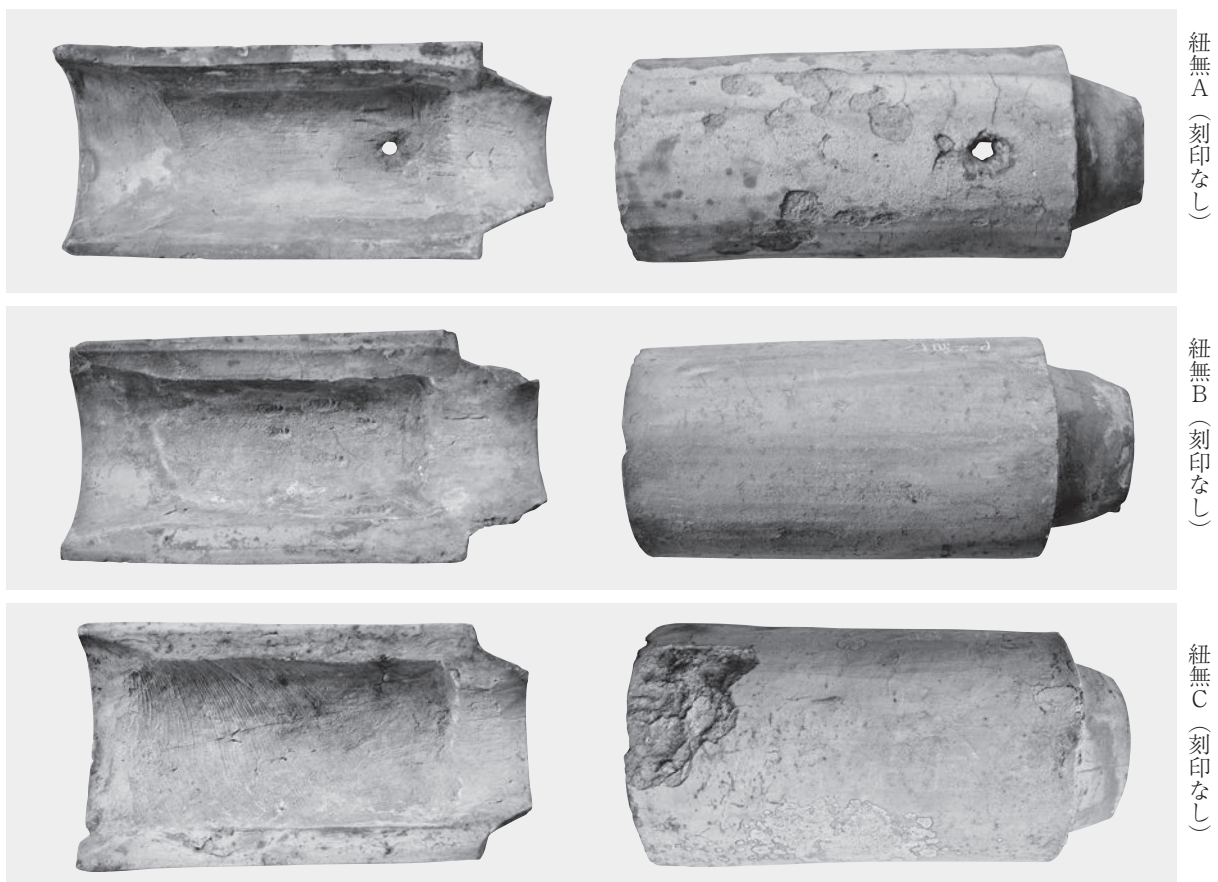


図177 室町時代後期の丸瓦 紐なし刻印なし

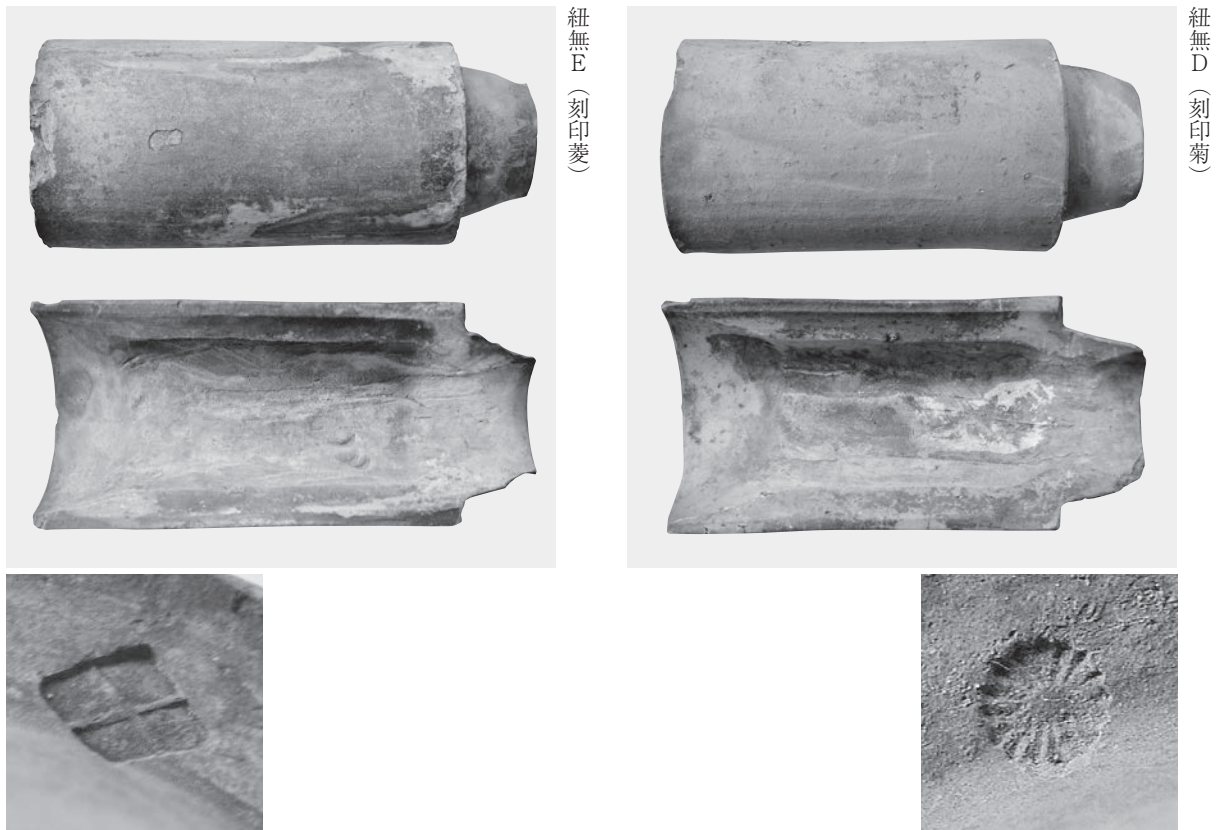


図178 室町時代後期の丸瓦 紐なし刻印あり

ロ 軒丸瓦

慶長期の軒丸瓦は、五八本（軒丸瓦全体の一五・一八％）であった。瓦当文様は、「東大寺」の文字を三角形に配し圏線で囲み、周囲に珠文を配した一種類で、慶長期の平瓦・丸瓦と一致する刻印が見られた。

ハ 平瓦

慶長期の平瓦は、三、二七九枚（平瓦全体の一四・四五％）であった。瓦の厚さが厚く、室町時代の瓦と同様に木口に刻印しているものが見られ、刻印は一六種類確認された。

ニ 丸瓦

慶長期の丸瓦は、一、〇二三本（丸瓦全体の一四・二七％）であった。吊紐痕の形状により吊紐痕二段のものが一種類、一段のものが二種類、計三種類に分類できる。いずれも表面には篋ナデを施し、裏面には鉄線切痕がみられる。また玉縁側の木口に刻印が押されたものが多く見られ、七種類の刻印が見られた。

(六) 元禄期

元禄六年には、比較的大がかりな修理が行われており、瓦も多くが取り替えられたようで、各種の瓦にこの年紀を記した刻印を見ることができるといえる。

イ 軒平瓦

元禄期の軒平瓦は、一一枚（軒平瓦全体の二・九一％）残存していた。瓦当文様は一種類で、「東」「大」「寺」の各文字を圏線で囲み瓦当中央に配し、左右に唐草文を配したもので、鎌倉時代の文様を模していた。瓦当面における文様の幅は鎌倉時代のものよりも狭くなり、その部分には江戸時代の特徴を表している。

ロ 軒丸瓦

元禄期の軒丸瓦は、三五本（軒丸瓦全体の九・一六％）であった。瓦当文様は圏線で囲んだ「東」「大」「寺」の各文字を三角形に配し、さらに全部を一



図179 慶長期 各種軒瓦